
霞と拓の日常会話

moro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霞と拓の日常会話

【Nコード】

N5286B

【作者名】

moro

【あらすじ】

彼女な霞と彼氏な拓。二人はいつでも会話する。普通の会話と思いきや、いつの間にかハイテンション！「なあ霞？」「なあに、拓」そんな感じで送ります、二人の世界へご案内！！！！

第1話 霞と拓と隠しモノ（前書き）

読者の方の後押しもあり、連載することになりました！

第1話 霞と拓と隠しモノ

「なあ霞？」

「なあに、拓」

「俺らつて恋人だよな？」

「ええそうよ。これは天地がひっくり返ったって変えられようのない事実だわ」

「さすが霞だ。少しだけ恥ずかしいことも平気で言えるようだな」

「少しも恥ずかしくなんかないわ。私たちの愛は永遠に不滅なもの」

「すばらしいな霞。その発言には喜ばされるばかりだ……………」

3

「ふふ、ありがとう」

「そこで質問だ、霞」

「なあに、拓」

「……………どうして俺は、恋人であり永遠の愛を約束したものである霞に

首輪を付けられなければならないんだ……………!!」

「あら、お気に召さなかった？」

「お気に召してたまるか！！いいから質問に答える！」

「……ここは、恋人だからあえて付けているとでも答えたほうがいいのかしら？」

「疑問形で返すな！！というかそれじゃあ俺がそっち系の趣味の人みたいじゃないか！」

「ちがった？」

「ちがうよ！え、今までそんな目で俺のこと見てたの！？」

「……………」

「お願いだから目を逸らさないでくれ……………」

「冗談はここまでにしておいて」

「冗談かよ…………。あ、いや冗談で助かった…………」

「拓」

「…………なんだ、霞」

「呼んだだけ」

「小学生かおまえは！俺の質問の答えが返ってくると思ったのに！」

「ふふ、あなたの突っ込みはいつもたまらないわ」

「ボケなんだな！？ボケだったんだな！？」

「失礼ね。いつも校内模試1位、全国模試100位以内に入っている私に向かってボケですって？」

「そのボケじゃねえよ！………ってうそオ！！お前そんなに頭良かったっけ？」

「冗談よ」

「わかりにくいボケはやめてくれ………」

「ボケは苦手なのよ」

「うそつけ！俺はこの会話の中で何回エクスクラメーションマークを使ったかわからねえぞ！！」

「19回」

「数えんな！」

「やっぱりあなたに突っ込まれるのはたまらないわ………！」

「（日本語って少しいじるだけでエロく感じるな………」

「どっつしたの？」

「い、いえ！何でもありません！」

「…まあいいわ。話を戻しましょう」

「……………お前が話を逸らしたんだろっ」

「拓。あなた私に謝らなければいけないことがあるんじゃない？」

「な、なななな何を？」

「動揺しすぎよ。」

「そそそ、そんなことないって」

「ふうん、あくまでもとぼける気ね。」

「……………ど、どうしたんだ？いきなり俺の本棚をあさり出したりして

…」

「チッ、」じじゃないか」

「舌打ちしましたよこの人…」

「それなら……………」

「（ああっ、そこは…！）どどどど、どうしたんだ？次はベッドの下なんか覗き込んで…。そこは俺の命の次の次の次の次くらいに大切なもので尚且つ俺の夜のお供が眠っているのであまり触らないでほしいなというかなんと言う」あったわ」かつ…！」

「な、なにがだい？霞には少々刺激が強すぎる本だったかな？それならこっちのソフトなや」

「こんな意外なものがあつたわ」

「……………！！…………… すいませんでした謝らせてくださいなんでもいたしますからそんな軽蔑の目で見ないでくださいお願いします霞様」

「ならまず、どういう経緯であなたがこんなモノを持っているか聞かせてもらいましょうか？」

「はい説明させていただきます。あれは一週間前私めが霞様のお部屋に御呼ばれになったときでし」

「その気持ちの悪い敬語をやめて」

「……………でだ、あの時は確かお前の新作の小説を見に行つてたんだよな？」

「そうだったわね」

「それが原稿用紙100枚くらいだったから必然的に読むのに時間がかかるわけだ。しかしそうなる俺が読んでいる間お前は暇だろう？そこでお前は飲み物でも買って来るといつて家を出たんだ」

「ふうん…それで？」

「最初は何も考えず、一心に霞の小説を読んでいたんだ。おもしろいからな」

「そう、ありがとう」

「（どこか棒読みのような気がする…）しかしお前の知っての通り俺は文字を読むのが早い。お前が帰ってくるだろう時間よりも早々に読み終えてしまった。しばらく手持ち無沙汰のような感じで過ごしていたんだが、俺はある事実に気づいてしまったんだ……」

「……………」

「ここは女の子の部屋じゃないか！！とね」

「あたりまえじゃない」

「いや、霞の部屋に入るのは初めてじゃないからな、あまり意識しなかったんだ。それより問題はそこじゃあない。なんと今回は一人きりだ！霞の両親は遅くまで帰ってこないし霞が帰ってくるまでには最低でも20分はかかる。…これは長年の夢だったことを実行するしかないっ、とね」

「……………それで実行した結果というのが、

この私のショーツだったということね」

「ショーツなんていうな！これはパンティーだ！！言い間違いは許さな、い…ぞ？」

「ひいひいひいひい！やめるー！ー！それだけはやめてくれー！
ー！ー！手が、手首がああー！ー！」

「落ち着きなさい。すべてはあなたが吐けばすむことよ」

「はあはあ…、わ、わかった話す。話すよ」

「……………」

「（うわぁ…霞すごい恥ずかしそうだよ）…………お前の想像してる通りだよ」

「そ、それって…」

「自慰」

「……………」

「この一週間毎日だった…。お前のことばかりを想像していた……………」

「……………」

「ふ、…侮蔑するならそうしてくれ。軽蔑するならそうしてくれ。
お前にはその権利があるんだ」

「そんなことしないわ」

「……………」

「あなたは私のことを想いながらしたのでしょう？嬉しい限りだわ」

「霞……………」

「でもね…」

「でも？」

「私が怒っている理由はそんなことじゃないのよ」

「？」

「なぜ本物の私の身体をオカズにしなかったの？」

「ブツ……………」

「パンティーなんか使ってオ……………なんかしなくても、私の身体があるじゃない」

「ナ……………って言っちゃった……………！俺がせっかく漢字にしたのに……………！」

「ねえ……………」

「そんな扇情的な目で俺を見ないでくれ……………！ああ……………！おまつ、胸のボタンが……………！」

「た、く…う…」

「……………!!!もう我慢ならん!!!!ガオーー!!!」

「!」

「はいストップ」

「!!!!!!!」

「ふふ、欲情した？」

「……………!!!」

「よかつたわ、あなたに首輪を付けておいて。さっきあの柱と繋いでおいたのよ」

「か、霞さん…」

「なあに?どうしたの?床に突っ伏しちゃったりして」

「これがあなた流のお仕置き方法ですか…」

「ふふふ」

「こ、こええよ…」

「あなたがわたしのパンティーを盗んだりなんかするからよ」

「も、申し訳ない…」

「（頼んでくれたら考えても良かったのに……）」

「ん？なんか言ったか？」

「なにも言っていないわ」

「……………」

「じゃ、私はそろそろ帰るわね。狼さんに襲われても困るし」

「うっ……………わ、悪かったって……………」

「本当に反省してる？」

「ああ、本当だ」

「それじゃあこれ、あげるわ」

「へ？」

「それで私を想いながら、存分に堪能しなさい」

呆然とたたずむ俺を横目に、霞は機嫌よさそうに俺の部屋から出て行っちゃったとさ！

第1話 霞と拓と隠しモノ（後書き）

完全に見切り発車です（汗）

更新速度は、読者の方の感想及び評価によって決まります。悪かったら遅くなるのではなく、反応が無かったら超遅くなるのです（笑）早くて一週間、遅くて二週間といったところでしょうか。どうか期待せずに、お待ちください！

楽しかったと思われた方は、気軽に感想をお寄せください。少しでもそんな風に思ってくれる人がいるならば、この二人は永遠にボケ続けます。

第2話 霞と拓とバレンタインデー

「ねえ拓？」

「なんだ、霞」

「貴方、今日は何日か知っているかしら？」

「ああ知っているぞ。2月14日だな！！」

「さすがは私の拓ね。あっていて当然のことを自信満々に言っているわ」

「……………」

「じゃあ今日が何の日か、知ってる？」

「…ああ知っているぞ。バレンタインデーだな…」

「素敵よ拓。日本中で知らない人はいないってくらい有名な日なのに、なんだか自信なさ気ね。もしかしてもともと足りない脳細胞が抜け落ちて記憶があいまいなのかしら」

「……………」

「あら、どうしたの？黙っちゃって。口を閉じていたらあなたの低くて渋い、鼻にかかるような聞き苦しい声が聞こえないわ」

「なんなんださっきから！！俺のこと蹴落としすぎだろう！！」

「そんなことないわ。事実を言ったまでのこと」

「余計に悪いよ！え、ほんとに俺の声聞き苦しいの！？そんな事実聞きたくなかったー！！」

「取り乱す必要はないわ。安心なさい、そんな汚い声も含めて貴方が好きなのよ。」

「フォローになつてねえー！！」

「ええしてないもの」

「……………どうしたんだ、今日は？いつになく暴言が多いじゃないか」

「そんなことないわ、私はいつもどおりよ。いつもどおり、私は貴方の股を弄り続けるわ」

「ちょっと待てー！！その発言はおかしいだろう！今はそんなことできる状態じゃあないしとかそんなことしたことないしまだそんな関係に至ってないしいやちよつとされたいけども」

「混乱しすぎよ」

「はっ！…ああ、すまない」

「……………されたいの？」

「い、いいいいやちがう！！今のはアレだ！あのく、そう！言葉の綾！言葉の綾なんだ！混乱した拍子にポロツと出ちゃったみたいなの」

「!!」

「そうっ」

「(あつさり引きさがられるのもなあ…)」

「とにかく、私はいつもどおりよ」

「そんな不機嫌な言い方と冷たい目線で言われても説得力がないんですが…」

「あら、じゃあいつも私はどんな言い方でどんな目線なの？」

「え?…そりゃあ…」

「……………?」

「一言一言発するたびに聞き手が何かに目覚めてしまいそうな投げやりな言い方で、少し目を細めるだけで極道の方たちがマツハ2くらいで逃げ帰りそうな無表情な目線」

「……………」

「いだだだだだだだだっ!!!…!!…!!痛いですー!!!…!!あ、足の小指が俺の身体からおさらばにイイイイ!?!?!?」

「貴方がへんなことを言うからよ」

「や、これは紛れもない事実うううツツツ!!!…!!引つ張らないでええええ!!!…!!この若さで円形脱毛症はイヤー!!!…!!」

「！」

「大丈夫よ。私は貴方のすべてを受け入れる」

「受け入れんなー！！というかなんかかっこいい台詞なのがなおさら嫌だ！！今は全くもって喜べないっ！！」

「仕方ないわね……。じゃあ代わりに貴方の眉毛を片方だけすべて引き千切るわ」

「もつと嫌だー！！」

「文句の多い子ね」

「……うう、なんなんだこの扱いは……」

「ふん、こんなことは貴方がやったこととの比じゃないわ」

「……？貴方がやったことって？」

「……」

「やっぱりなんかあったんじゃないか」

「なにもないわ」

「ほら、言ってみてくれ。自覚は無いが俺がなんかやってしまったんだろっ？」

「……」

「俺が悪いのなら謝るし、償いもするぞ」

「貴方、今日……」

「ん？俺が今日どうしたって？」

「部活の後輩から、本命のチョコレートを受け取っていたでしょ」

「！！！！！」

「義理ならまだしも、本命のチョコを受け取るなんて……！！！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

「なに？」

「お前が不機嫌だった理由はわかった。そしてなおかつ俺が原因なのも認めよう！しかし、しかし………なぜお前がそのことを知っている………！！？」

「あら、そんなに不思議なこと？」

「ああ、とても不思議だ……。なぜならあの子とは、お前が帰った後そしてなおかつ体育館の裏側で会い、誰にも気づかれなかったから誰も知っているはずがないんだから………！！！！！」

「どうして本命とわかっていて受け取ったりしたの？」

「…男にとってはな、女の子にチョコをもらえるとというのはもてるもてない、彼女がいるいないにかかわらずうれしいことなんだよ。…それに自分を想ってくれている女の子を無下にすることなんて俺にできるわけないだろう？」

「素敵なセリフね、流石は私の拓。でも、貴方の良かれと思ってした些細な行動が女の子を傷つけてしまうということもあるのよ。理解してちょうだい」

「ああ、すまない。反省している」

「そう、それなら許してあげる」

「すばらしいな、霞。心が太平洋よりも寛大だ」

「ふふ、ありがとう。………ところで私から貴方にプレゼントがあるわ」

「（ああそうか。まだ霞からはチョコレートももらってなかったな）」

「はい、これ。ハッピーバレンタイン」

「ああ、ありがとう霞……ッ……!」

「どうだったの？」

「ここ、これは、チョコ、チョコだけなのかな？」

「ええそうよ。あの子に負けられないと思ってね、私の想いを形にしました」

「そうか、これはあの子に負けていないな……。すごくかすみの想いが伝わってくるぜ……。なんてったって……」

「一辺50cmの立方体だもんなあ……………！！！！！！」

「隅から隅までチョコレートだね。あまりにうれしくて感極まっちゃった？」

「ああ……（これを食べるときのことを想像すると）涙が出てくるぜ……」

「ふふ、誰かのために物を作るって楽しいわね。その人が喜んでくれるとなおさらだわ」

「（ああ、その屈託のない笑顔は……！悪気はないんだよなあ……………）」

「うれしいでしょう？」

「あ、ああ！うれしいぞ！すっげーうれしい！！何日か前くらいに、おまえのパンティーをもらったとき並にうれしいな！！！！」

「（なぜ動揺しているのかしら？比較する対象がアレだし……）」

「さ、さてと！毎年恒例の行事も終わったし、お前はそろそろ帰る時間じゃあないか！？」

「え、え？まだ来てから一時間も経っていないわよ？」

「ほほほら、お前は宿題やら小説やらで忙しいだろう？」

「あ、そうだった！締め切りが近いんだったわ！悪かったわね、ろくな会話もできないで」

「（俺にはとても密な会話に思えたが……）」

「それじゃあね、拓。明日また会ったときにもそのチョコの感想を聞かせてもらおうわ」

「お、おうよ！食べるのが楽しみだぜ！！また明日な！！」

そうしてすべてのチョコを泣きながら一日で平らげた俺は、次の日から一時期、チョコを見るだけで白目をむくようになってしまいましたとさ！

第2話 霞と拓とバレンタインデー（後書き）

感想を送ってきてくださる読者の方々に、多大なる感謝を。

楽しかったと思われた方は、気軽に感想をお寄せください。

少しでもそんな風に思ってくれる人がいるならば、この二人は永遠にボケ続けます。

第3話 霞と拓と男女の境界

「なあ霞？」

「なあに、拓？」

「お前はいつでも俺のそばにいてくれるな」

「ええそうよ。世界中の恋人たちがどうなのかはよく知らないけど、私たちはいつも一緒にいるわね。」

「ああ、お前がいつも俺の隣にいることは周知の事実だしな。うれしい限りだよ」

「貴方が望む限り、私は貴方と共にあるわ」

「すばらしいな、霞。俺は一生に一度は言われてみたいセリフを、17年生きてきて早くも手に入れてしまったらしい」

「ふふ、ありがとう」

「（いやしかし……………、しかしだな…。この状況だけは……………！）」

「？」

「あいな、霞」

「なにかしら？」

「世界には、な？男と女は分けなければならぬときだあるんだよ」

「あら、貴方の口からそんなことが出るなんて、意外ね。貴方は確か、男尊女卑やその逆も嫌いじゃあなかったかしら？」

「その通りだ。俺は男女を差別するやつは嫌いだからな」

「じゃあどうしてそんなことを言うの？貴方は今、それを実行しなければならぬときがあると言ったのよ？」

「……………じゃあ例えば、だ。例えば、女子更衣室と男子更衣室が一緒になっちゃったら、どう思う？」

「そうね……。とりあえず、女性と鉢合わせてしまった男性は生きてはいないでしょうね」

「とりあえず、で死は決定かよ！」

「生かすとしても、男性を襲うのは確定的よ」

「まあ…裸を見られたら、殴る蹴るは仕方が無いと思」

「ナニを観察するのに絶好の機会ですものね」

「そっちの“襲う”かい！…！」

「見るのが終わったら、下半身のみ潰して再起不能にしてやるわ」

「やめてやってくれ！というかやめてくれ！！それは聞き手にも多大なダメージを与えるから！！！！」

「大丈夫。私も鬼ではないから、片方だけ残しておいてあげるわ」

「この鬼――！！」

「安心なさい。もしも目撃者が拓だったら、私としつぱり決め込んであげるわ」

「別の意味で危険だ！！！！というか場所くらい選べ！！」

「あら、それは暗に、場所を選べばヤっちゃっていいって言っているのかしら？」

「！！い、いやちが」

「ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

「笑い方が怖――！！！！いつもより“ふ”が多いですよー！！」

「笑顔が怖いなんて失礼な人ね。そんな世間知らずの人はお仕置きしちゃうぞ」

「や、そんなセリフを無表情で言われても別にかわいくな
ミギヤ――！！！！お、俺の頬がアアアアア！！俺は海賊王に
なると宣言しているやつみたいにイイイイ！！！！！！」

「ぶんぶん！！」

「あだだだだアアアアアア！！！！！！かわいいかわいかわいかわい
いなア――！！！！霞様の怒り方は世界一かわいいぜエエエ！！！！」

「絶対に違つよー！というかこれまでの話のどこをどう捻じ曲げたらそんな結論に至るんだ！しかしそれについては大変うれしい状態です！……！」

「ふん………」

「（ああー！思わず本音が！）ほ、ほら！違つだろ？男と女は分けなければならぬときだあるという話だよ！」

「そうだったわね」

「で、だ。なぜ俺がいきなりそんな話をしたのかというと

「……………」

「この、今の状況にあるんだ」

「……？至つて普通の状況だと思うのだけれど？」

「お前はコレが普通の景色だというんだな……………！！」

「ええ、きわめて普通だわ。……………あら、いつの間にか室内にいるわね、地面がタイルだわ。さっきまで公園を散歩していたはずなのに」

「そうか、お前は気が付いていなかったんだな？というか気づいていないで入つたのだと思いたい」

「ええ、もちろん全然気が付いていなかったわ。ここが

男子トイレだったなんて」

「やっぱり気が付いてんじゃないか！！！わかっていて敢えて入ったんだな！？」

「そんなことないわ、失礼ね。わかっていて入ったとか、ちよつと前から入って見たかったとか、立ってするところを見てみたいとか、拓のチン を凝視してみたいとか、あわよくばその次までなんて全然全く欠片さえも思っていないわ」

「ああ！お前は幼少の頃から感情が読み取れなかったが、17年たった今初めて手に取るようにわかるぜ……………！！！！」

「ごめんなさいね、思わず本音が」

「やっぱりー！！！」

「いいじゃない別に。私だって思春期なのよ。男の子の身体に興味を持つのは当然じゃあなくて？」

「そうだな！お前が自分の身体を持て余しているのは今までの付き合いで重々承知だ！！！」

「あら、知っていたの？知りながら何もしなかったなんて……………なんて鬼畜……………！」

「違っただろー!!!」

「こ、これが放置プレイ」

「それも違っただろー!!!」

「ハアハア…、快感だわぁ…」

「そしてなんか変なキャラになっちゃったー!!!」

「冗談よ」

「どこからどこまでが冗談なのかによっては今後の対応を考える必要があるな!!!」

「対応なんか考えなくてもいいわ。私はいつでも貴方のチンに虜」

「俺の魅力は下半身だけなのか!? つーかお前に見せたことないだろー!!!」

「……………」

「なぜそこで赤くなる!? …………… ああ、そうだった! こいつにはちょっと前にナニしてるところを見られたんだっただろー!!!」

「ふふ、あの時の事は思い出すだけで濡れるわ…………!!!」

「だから思い出すなど言っているだろー!!!」

「わかったわ。貴方がそう言うのなら、もう思い出さない」

「……………」

「だからやめろ　　って、あれ？」

（どうしたんだ？急にやめて…。これじゃあちょっと物足りないな
ゲフンゲフン）

「じよ、じよ、冗談よ」

「（無理矢理に体裁を取り繕おうとしてる……！！いまさら遅
ッ……）」

「あ、あらあら。本気にしちゃったかしら？拓ったらス、スケベな
んだから」

「（人のこと言えねー！）」

「……ダメよ？そういうことは考えるだけにしておきなさい」

「……………（どこか理不尽な気がする……）」

「自分たちは高校を卒業するまで清い関係でいる、と誓ったのはど
この誰だったかしら？」

「……………ああ、そうだな。誓ったからには守らなければいけない
な」

「ふふ、素敵よ、私の拓。約束は守る、が貴方の誓約ですものね」

「ああそうだ。だから、すまないが、お前にはそれまで我慢をして

もらわなければならない」

「ええ、大丈夫よ。貴方のためならそんなこと、息をすることより容易たやすいわ」

「（お前は今まさに、お前の言う、息をするより容易いことができ
ていなかったんだがな……！）」

「それじゃあ行きましようか。ここに長居は無用だわ」

「ああ、そうだな。こんなところに男女でいるわけにはいかないし
な。公園の男子トイレに男と女なんてシチュエーション、誰かに見
られたら」

「あ

「あ

「……………え？」

すぐさま俺たち二人は、短距離走の世界記録保持者も腰を抜かすほどの速さでその場から立ち去りましたとさ！

第3話 霞と拓と男女の境界（後書き）

これにてストック終了です。次話更新まで今しばらくお待ちください。

楽しかったと思われた方は、気軽に感想をお寄せください。

少しでもそんな風に思ってくれる人がいるならば、この二人は永遠にボケ続けます。

第4話 霞と拓とアルファベット(前書き)

今回からちょっと志向を変えます……わかるかな？

第4話 霞と拓とアルファベット

「なあ霞？」

「なあに、拓」

「空が、青いなあ」

「ええ、蒼^{あお}く、澄みきっているわね」

「ああ、雲ひとつ無い」

「両手を広げたら、飛んでいってしまいそうだわ」

「確かに吸い込まれそうではあるな。しかし飛べはしないだろう？」

「例えば、の話よ。だけど飛んでみたいと言う気持ちはあるわ」

「俺はな、思うんだ。人間って生き物は、これから科学が進歩して、いくら世の中が便利になっただとしても、絶対に空は飛べないのではないか、とね」

「あら、飛べるわよ。あなたは飛行機という名のという乗り物を知らないのかしら？ ハンググライダーでも飛べるわ。……！！……それを知らないなんて、やっぱりもしかして」

「いや、そうではなくて生身の話……って、どうした？」

「……ああ、恐れていたことが起きてしまったわ」

「？」

「とうとう貴方は、例の病にかかってしまったのね…」

「は？いや何の？」

「若年性アルツハイマー」

「違うよ！！というかやつぱりってなんだ！！恐れていたのか！？
そんな傾向はなかったはずだろ！？」

「悲しいわ。もはや罹^{かか}っているという事実さえも忘れて」

「ちゃんと俺の話を聞け！！」

「はいはい、聞いてあげましょう。なんですか？拓さん」

「俺に対する扱いが近所のおばあちゃんみたいに！？」

「おじいちゃんよ」

「どっちでもいい！！！！」

「どっちもイイなんて……………まさか貴方に、熟女やバイの趣味が
あったとは！！」

「すごいな！お前の聞き間違いは神様級だぜ！！！！」

「あら、ありがとう」

「本気で褒められていると思うのならいい病院を紹介してやるぜ……！」

「……病院、ね。……そこに行ったら私はおそらく精密検査を受けさせられるでしょうね……」

「……おまえまさか……！」

「ええ、ずいぶん前から病に罹^{かか}っているの
恋と
いう病にね」

「こいつバカだ……！！！！！！」

「あなたのことを考えると、毎晩毎晩ショーツがぐっしょり」

「さらに変態だ……！！！！！！」

「でもお風呂上りに濡れちゃうと面倒なことこの上ないわ」

「そう思うのなら少しはソレを自粛しろ……！」

「それは無理な話ね。あなたと会った晩はいつもこうなるの。ほとんど生理現象よ」

「（俺はたった今『恋』と『変』の漢字が似ている理由を垣間見た気がするぜ……！！）」

「変態と言えば、『キヤー！H！』とか『ハアハアお姉さんHしよ……！！』のHは変態（HENTAI）の頭文字から来ているの知っ

「てた？」

「そうなのか？知らなかった。ついでに言えば、お前にそんな声色を出す能力があるなんて全く知らなかったぜ！」

「あら、私は様々な人の声が真似できるわよ？」

「ほう、そりゃちょっとした特技だな。聞かせてくれよ」

「そつね……」

「……………」

「『え、俺？したした。昨日シコシコしたよ』」

「俺の声だー！ー！！しかも発言が意味わからねー！ー！！なんだよそれ！そんなこと言ったことないし、これから先の長い人生死んでも言つつもりはないね！！というか誰に話しかけてるんだ！！」

「え？だって昨日してたでしょ？」

「んな！？」

「じゃあ次」

「……………」

「『大丈夫だって、大丈夫……。痛くないから…………』」

「場面がありありと想像できるー！ー！！というかお前声似すぎだか

「らなんか嫌だー!!」

「早くこんな日が来るといいわね」

「え? いや... まあ、... うん」

「(男が頬を染めてもじもじすると気持ち悪いわね...)」

「なにか言ったか?」

「いえ何も。ほら、次いくわよ」

「(なぜか霞のものまねコーナーみたいになっただな...)」

「『大丈夫だって、大丈夫...。霞は今出かけてるから...』」

「今度は俺の浮気設定か!!! そればかりは絶対にしないぞ!」

「『ほら... 自分の娘の心配なんかしないで... 今晚は楽しもうぜ

...』」

「しかも母親ー!!!! これ以降霞親子が気まずい関係に!?!」

「『か、霞! お前帰ってくるのが早いじゃないか!』」

「いきなり修羅場! どうする俺、どーすんのよ!」

「『ほ、ほーらかすみいー? 怒らないで親子一緒にし、しっぽりイこうじゃないかあー...。夢の親子丼だよー...?』」

「ごまかす作戦に出たー！俺超なさけねえ！というか俺はこれでごまかしたつもりか!？」

「『ばーびっぺんばくびゃく(さー一件落着)。ばばばびばびばー(おじゃましましたー)』」

「ああ！霞の顔が、ボコされて腫れた俺の顔に見える!！」

「と、こんな感じになるのが貴方の運命ね」

「決定事項ー!！」

「ね？私のものまね似てたでしょ？」

「……ああ、それに関しては認めざるを得ないな」

「いつも聞いている声だから簡単にできたわ」

「そうか。でもやったの俺の声だけだぞ？ものまねって言うぐらいなら色々できないと」

「あら、他のもやってほしいの?」

「んー、じゃあ一人だけ誰かやってよ」

「そうね……………じゃあAV女優の喘あえぎ声のものま

「Hが変態の頭文字だとは知らなかったなあ」

「放置プレイ……………素敵ね。ぞくぞくするわ」

「じゃあこれは知ってるか？Hの後にIがくるってやつ」

「……………知らないわよ、そんなの」

「ご、ごめんごめん。そんなに不機嫌になるなよ。一回ツッコミしなかつただけじゃないか」

「何を言ってるの！？ツッコミは大事なのよ！？いい！？ツッコミがないと漫才は成り立たないし、日常会話だつてつまらなくなるし、夜だつて突っ込みが激しくないと気持ちよくないじゃない！！」

「お、おう…………、すまない。それにしても熱弁だな…………。…………ん？なんか最後のセリフはおかしいような…………？」

「それで？Iがどうしたつて？」

「あ、ああ。アルファベットの順番で言つたら…G・H・I・J…^{エッチ}でHの後にI^{あい}がくるだろう？だからエッチしようぜ、っていうアホな男の口説き文句さ」

「それは遺憾ね。そんなこと言つた奴の陰毛を永久脱毛してやりたいくらいだわ」

「そんなに！？しかし男だつたらすごい屈辱だな！」

「女だつたら、余計にエロくなるわね」

「（パイ　ンパイ　ンパイ　ンパイ　ンパイ　ンパイ　ンパイ　ンパイ　ンパイ　ンパイ）」

パイ　ンパイ　ンパイ　ンパイ　ンパイ　ン」

「それはいいとして」

「ハッ」

「……………その理屈だったら私たちはまだ愛し合っていないと
いうことになるじゃない」

「…ああ……………そうか。それは絶対にありえないな」

「ええ。だから全剃りよ」

「……………」

「それにしてもアルファベット順だからって安易な考えね」

「でも上手いよな。そんなこと普通考え付かないよ」

「そんなの上手くないわよ。私ならもっと面白いこと考えられるわ」

「ほう、たいした自信だな。早速考えてみるよ」

「ええ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「できたわ」

「おっ早いな）どうせさっきから考えてたんだろ……）」

「Hの後にIヘッチが来るんでしょ？」

「ああ、そうだったな」

「それじゃあ問題。Hの前にもIの前にもすることって何だ？」

「.？」

「ほら、早く答えて」

「じゃ、じゃあ……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「じゅんなぞら」

「よろしい」

「……………答えは何だよ」

「わからないの？貴方毎日してるじゃない」

「？」

「じゃあアルファベットを順番に言ってみて」

「？…：A B C D E F G」

「ストップ！」

「……………G？」

「そう、Gよ」

「……………すまない、まだわからないな」

「仕方ないわね。正解を言っわよ？」

「……………（ゴクリ）」

「^{エッチ}Hの前にも^{あい}Iの前にも

「ヤムツ」

「いじめなれら」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…………面白くなかった…………？」

「……………」

「…………あ、あれ？」

「……………」

G) 自慰(を)するじゃない

久しぶりにボケが滑った霞は、受験に失敗した学生の様に暗黒の才
ーラを纏まとって落ち込んでいたとさ！

第4話 霞と拓とアルファベット（後書き）

修学旅行楽しかったー！！ということで帰ってきた直後に投稿です。

書くとき気持ちが高揚していたので、いつもより変になりましたね

（笑

ではまた次の更新まで。

楽しかったと思われた方は、気軽に感想をお寄せください。

少しでもそんな風に思ってくれる人がいるならば、この二人は永遠にボケ続けます。

追伸

更新速度は読者の方の評価及び感想しだいです。

第5話 霞と拓と映画（前書き）

霞が焦っています。

第5話 霞と拓と映画

「なあ霞？」

「なあに、拓」

「さっきの映画面白かったな」

「ええそうね、久しぶりに見に来てよかったと思えた映画だったわ」

「そうだよな。あれだけ興奮する映画はそうそうないぜ」

「興奮……………？別にしなかったけど」

「（ああそうか。こいつの興奮レーダーはエロ方面だけなんだ……………」

「特に最後は見ものだったわ」

「だよな。特に最後のどんでん返しに度肝を抜かれたぜ……………」

「そうね。特に最後の……………り返しにナニを抜かれたわ……………」

「（伏字が多くてどこを突っ込めばいいのかわからない……………！……………）」

「でもいくつか気に入らないところがあったわね」

「……………そうか？俺的には100点満点だったんだが……………」

「内容的にはそうかもしれないけれど……」

「……………?」

「ベッドシーンが5分32秒しかなかったわ……………!!!」

「やっぱりそこかー!!!しかも正確すぎ!!!計ってたのか!?そんな暇があったら映画に集中しろ!!!というかかつてないくらい悔しそうだな!!!」

「あら、映画に集中してよかったの?」

「へ?お、おう。いいに決まってるじゃないか」

「そうになると、ベッドシーンのみ私の右手が私の大事なところで激しく動くことになるわ　　映画館の中でね。フッフ」

「へー、オマエノミギテツテトクシユナランダナ」

「(ああ!ついに突っ込みを放棄!?)」

「それよりもお前、意外と涙もろいんだな」

「……………あら、知らなかった?私は超がつくほど純な上に、涙腺はそっと触れるだけで壊れてしまうほど弱いだよ?」

「ほづ、そうなのか。いつも下ネタばかり言って俺を困らせる誰かさんに聞かせてやりたいぜ……………!!!」

「あら、そんな人いるの?私と気が合いそうな人ね」

「……………」

「涙というのは人を健康にするのよ」

「……………それは初耳だな。そうなのか？」

「ええ、何かの本で見たわ。涙を出すということは感情を外に出すということ。それによってストレス発散と似たような刺激を脳に送るそうよ」

「ストレス？お前ストレスなんか感じていたのか？」

「あたりまえよ！毎日ボケる私の身にもなってみなさい！」

「ええ！？それ怒っていいところ！？」

「まあ貴方に突っ込まれることで少しは緩和されるのだけれどね」

「（うつん、日本語としてはあっているんだが……………こいつが言っていると口く感じる俺は間違っているのだろうか……………）」

「まあ貴方の黒光りする長い棒を私のナカにぶち込むことで少しは緩和されるのだけれどね」

「間違ってたなかったー！！なぜ二回言った！？そしてなぜ卑猥に言い直したー！？」

「あら、だって貴方もの欲しそうな表情してたじゃない」

「どこをどう見ればそうなる！？勘違いも甚だしいぜ！……！」

「ああああ、本当に勘違いなの？」

「……………！！！」

「ああああああああ、その驚いた表情は何？沈黙の肯定と言う言葉を知っているかしら？」

「……………！！！」

「ああああああああああ、言い返せないようじゃダメねえ」

「（かつてないほど悔しい……………！！……………でも）」

「ああああああああああああああああああ」

「あああ言い過ぎだ！！お前の口癖とは知っていたがもはや嫌味にしか聞こえないぞ！！！」

「もちろん嫌味よ。私の言葉で悔しそうな顔をしている貴方を見るのは、この上なく快感だわあ……………！！……！！……！！……！！」

「Sがここに君臨した……！！！」

「いいわあ、その目。見られているだけでイってしまいそう……………！！」

「Mもここに君臨した……！！！」

「よかったわね、拓。一発で二発分おいしいとはまさにこのこと」

「そんな慣用句聞いたことねえよ!!」

「でもMな貴方は嬉しいでしょう?」

「だから違つって言っているだろう!!」

「じゃあS?」

「残念ながら俺はどちらにも属しません!」

「そんなはずはないわ。どっちの気もあるという人はいるけど、どちらにも属さないという人はいないのよ」

「……何の根拠があつてそういつているんだ?」

「ドナスイヤン・アルフォーンズ・フランスワ・ド・サドさんが言つていたわ」

「名前長ツ!!よく覚えられたな!」

「ええ、私の記憶力と性的関心力を持つてすれば容易いことよ」

「後者の言葉の意味がわからないが、お前の言つことなら本当なんだろう。へー、そんなこと言つた人がいるんだ」

「え、ええ。ほ、本で見たわ」

「さすがは小説家だ。著名な作家も勉強しているんだな（読んでいる内容は感心しないケド）」

「あ、あたりまえよ。」

(ど、どうしよう、なんか感心しきっちゃっているわ。適当に言った名前なのに……。というか突っ込んでくれない拓も悪いのよ。サドなんて名前あるわけないだろー！とか言ってくれればいいのに……。……ここは早く話題を変えないと！)」

「どうした？」

「なんでもないわ。それより

昨日どんな種類の工口本

読んだ？」

「はあ！？」

「(間違ったー！！これは拓の声のものまね用のセリフだったー！！！)」

「本当にどうしたんだ？」

「(焦って話題を変えるといいことないわね……。……)だ、大丈夫大丈夫、大丈夫よ。私はいつだって正気だわ」

「え、なにその麻薬中毒者の言い訳みたいなセリフ。もしくは泥酔したお姉さん？」

「とにかくく！！話を戻しましょう！映画館プレイをしようという話だったでしょ！？」

「ええっ！？違くない！？」

「合ってるわ。さっきの映画館の後ろの席のカップルみたいに、人前で堂々と ○ してみたねって言うってたじゃない」

「絶対違うね！俺の脳にそんな卑猥な会話が繰り広げられたと言う記憶なんか欠片もないぜ！……いやしかし、それとは別に後ろのカップルが何をやってたか非常に気になるな……」

「でしょ？」

「伏字は三文字で真ん中だけ小さい……！？ということももしか……！」

「ええその通り。」

キッスよ」

「……………へ？キス？」

「いえ、キッスよ」

「（言い方なんて激しくどうでもいいが）な、なんだ。俺はてつきり」

「てつきり、何？もしかしてエッチとでも思った？あらあらあら、貴方はおバカさんなのかしら。映画館の中でエッチなんてするわけないでしょう？もししたとしても、あの大人数。すぐに気づかれるわ。ピンク映画の上映中でもそんなことする人はいないって言うのに、たいした想像力ね。いえ、この場合妄想かしら」

「くそッ……！！お前に正論を言われるとてつもなく腹が立つな……！！……ん？というか何でお前がピンク映画の事情なんか知っているんだ？」

「
.....
..... カンよ
.....
.....
.....
.....」

「（その沈黙の長さが霞の嘘を裏付けているが、ここはこいつのプライドのために目を瞑っておいてやるう...）」

そうか
「

「.....そうよ。そんなこと想像でわかるわ。映画館でエッチなんて、AVでも今時そんなシーンは無いというのに。.....あら、そういえば先週発売したDVDには ゲフンゲフン」

「お前には隠そうと言っ気持ちがあるのか...！」

「隠す？何の話？陰毛？」

「.....なんかもうどうでも良くなってきた.....」

「（ふふん、私の勝ちね）」

「（なんで勝ち誇ってんだこいつ.....？）」

「.....ふう、何かちょっと疲れたわね」

「そうか？俺はいつもと同じ疲れ具合だが」

「（じゃあ、私一人だけ焦ってたということかしら.....、不覚ね。仕返ししてやりたいけど.....。　　そうだ）」

「どこかで休むか？」

「そうね、ホテルがいいわ」

「……………どこかで休むか？」

「そうね、路地裏がいいわ」

「……………どこかで休むか？」

「そうね、トイレがいいわ」

「なんでそんなにアレを連想させるようなことを言うんだ！…とい
うか休むかと聞かれてトイレはどう考えてもおかしいだろう！…路
地裏も！…」

「じゃあどこがいいのよ」

「え？そ、そりゃあ……………ラ、ラブホテル？」

「ここにさっきと違う映画のチケットがあるわ」

「わかった！…ツツコミが大事なのは痛いくらいにわかったから突
つ込んでくれええ！…！放置プレイは嫌いだアアア…！！！！
「！」

「今からじゃもう終電もないし、また映画でも見ましよう」

「……………泣いていいか？」

「歩いて帰るよりましでしょっ？」

「……………」
「うだな」

「何泣いてるの？早く行きましょ」

「じじ」

「ほら、このチケット持って」

「ああ……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「なあ、俺たちはこれを見に行くのか？」

「ええそうよ。オールナイトにはぴったりじゃない」

「ああぴったりだ。そしてお前にもとてつもなくぴったりだなあ……
……………」

「ぶぶ、ぴったりでしょ？」

「ああぴったりだ」

「ふふ、大人でしょう?」

「ああ大人だ」

「ふふ、エロいでしょう?」

「ああエロい。……なあ、そろそろ突っ込んでもいいか。突っ込みの大事さがさっき急にわかったから」

「ええどうぞ、待っていたわ。思う存分突っ込んでちょうだい」

「よしじゃあ……」

「……」

「今から見に行くのって」

「……」

「ピンク映画かよおおおオオオオ——————!!!!!!」

『!!』

オチがいまいちDEATH!!

第5話 霞と拓と映画（後書き）

超うれしいことを言ってくれた読者がいたので、一週間で更新。

途中で出てくるカタカナの名前。霞は適当と言っていましたが、実は実在する人物です。でも調べても何もいいことはありません（笑）

楽しかったと思われた方は、気軽に感想をお寄せください。

少しでもそんな風に思ってくれる人がいるならば、この二人は永遠にボケ続けます。

第6話 霞と拓と服装（前書き）

遅れてすみません。お詫びに倍近い長さです。

第6話 霞と拓と服装

「なあ霞？」

「なあに、拓」

「お前はいつも流行に敏感だな」

「そうかしら？ 自覚はないのだけれど、確かに流行はやりのものは好きよ」

「ほう。例えば？」

「そうね……例えば、ファッションなんかもその内のひとつだわ」

「そうか。俺はそういうのに疎とといから今まで気が付かなかったな」

「あらひどい。貴方とは毎日会うから、それなりに気を遣つかってたのよ。」

「それはすまない」

「まったく。……じゃあ今来ているこの服は、何をテーマにしているかわかる？」

「……ああ、それはわかるぞ。わかりすぎるほどわかる」

「あらそうなの？ 貴方も意外と流行のものをわかっているじゃない」

「いや、今の時代、その服を知らない人のほうが少ないと思うぞ」

「ふふ、大げさよ」

「（……大げさ、ね）」

「じゃあ、拓。私のこの衣装について貴方のコメントをもらいたいのだけねど」

「ああ、いいぞ。でもちよっといいか」

「何？」

「俺がコメントをすれば、今までは普通を保っていたはずの会話がすべて崩れ去ってしまうんだが、いいのか？」

「ええいいわ。思う存分やってちょうだい」

「よし。じゃあ遠慮なく」

なんでてめえは俺の部屋でメイド服なんか着てやっがっるっんだ
アアアアーーーーー!!!!!!」

「ああっ!!--いつにも増して激しい!!--!!--!!--」

「『激しい!!』じゃねえ！意味がわからん!!何だそのカチューシヤは！何だその白と黒のフリフリは!!何だその心底動きにくそうな格好はアアアア……!!!!」

「らめえっ!!そんなに激しく突っ込んだらあっ壊れちゃうっ!!」

「壊れてる!一人で勝手に壊れてる!しかしそのセリフはエロすぎるぞコノヤロー!!」

「『らめえっ!』がポイントよ。この伝説の萌え言葉は数多くのエロ本などで活用されているわ」

「何か解説しだした……!!」

「『壊れちゃうっ!』が次のポイント。この言葉が一番相手の嗜虐心を刺激し、S心をかきたてるらしいのよ」

「……らしいって、いったいそれはどこの情報なんだ？」

「え?SM系AVだけど」

「当然のごとく言い放った……!!この前はそういつの見てるってこと隠してたのに!」

「女心と秋の空って、素敵な言葉よね」

「……………」

「ふふ、でも安心して。貴方への愛は永遠に変わらないから」

「……ああ、俺もだ。とてもうれしいセリフをありがとう。しかしメイド服じゃなかったらなおうれしい」

「あら、お気に召さなかった？」

「（いやお気に召す。むしろ召し上がりた……っじゃなくてっ！）いや、そうじゃなくて。いつものお前で言ってくれたら、実感がわくだろう？そうしたらよりお前が好きになれる」

「拓……………」

「霞……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………制服プレイのほうが良かったなんて……………!!」

「いい雰囲気だったのに……!!」

「でもそれでこそ、私の拓だわ。私と同じで、性癖がよりマニアックに」

「マニアック言うなー……って、お前はマニアックなのかよ!？」

「ええそうよ。だって貴方のことを愛しているもの」

「ちょっとマテ。この場合『だって』という接続語は適切ではないと思うのだけれどどうだろう!」

「これまでにないくらい適切だね。マニアックだから貴方を愛している。貴方を愛しているからマニアック」

「……………」

「私は他にもたくさんの性癖を持っているわ」

「（これ以上増えてどうする…………）」

「その内のひとつにね、私自身にも制御できないものがあって困っているのよ…………」

「…………お前が制御不能なんて厄介だな」

「そうなのよ。自分の意思とは関係ないのに…………」

「…………聞きたくはないが、どんな性癖なんだ?」

「『貴方の瞳でイっちゃうゾ』『性癖』」

「ネーミング最悪だー!」

「その名の通り、貴方に見つめられるとイっちゃうのよ」

「どんだけ面倒な体質してんだおまえは!!!」

「正確には、30秒じっと見つめられているとイキます」

「そんなわけねーだろ! そんな性癖いまままで生きてきた中で聞いたことないよ!?!」

「私が開発したのよ」

「その開発作業は世界でいらないものベスト10にランクインだおめでとう!!!」

「いや、来るべき時に備えようと思って」

「見つめられるだけでイクなんて特技はAVの中だけでしか必要性を感じないのだからどうだろう!?!」

「……そうね。それもアリかもしれない」

「かもしれないじゃないですよ霞サーーン!?!」

「冗談よ」

「……………そうデスカ」

「そうよ。私の身体を他の男にあげるなんて、拓が『霞のパンツの香りがー!!!』と裏声で叫びながら都会の大通りを疾走することくらいありえないわ」

「とっつってもわかりやすい例えをありがとう霞……………!!!」

「ユアウェルカム」

「（何故に英語？）」

「……………ほら、拓。私が貴方に対しての愛を語ったのだから、貴方も私に対して甘い言葉をささやくのが礼儀じゃない？」

「そんなのいつ語った!？」

「言ったじゃない。永遠に愛すとか他の男に身体をあげるなんてありえないとか」

「（それは愛を語ったというのか……………？）
そ、そうだったな」

「……………」

「え、えー……………あー、愛してる」

「それだけ？」

「うー……………お、お前のためだったら、何でもできるし何にでもなれる自信がある。お前のために一生を捧げてやるぞ」

「拓……………」

「霞……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」
「ん」

「……………」

「……………」
「あっ、ん」

「……………」
「?」

「……………」
「く、……………」
「はあ……………」
「ん……………」

「……………」
「?」

「……………」
「つああ、……………」
「いい……………」
「ツツ……………」
「!!!!!!」

「……………」
「!?!?!」

「……………」
「ハアハア……………」

「ど、どうしたんだ?いきなり震えだしたりして。それに息も荒いし、どこか具合でも悪いのか?何か知らんが、最後のほうは仰け反ってたし……………」

「え、ええ……………。大丈夫よ……………」

「本当か？お前、顔真つ赤じゃないか。熱でも」

「なんともないわ。ただ拓の視線で、かつてないまでにエクスタシーを感じただけ」

「心配して損したー！ー！ー！しかし本当にそれだけでイける思わなかつたぜ！ー！」

「あーあ……。ショーツがぐつしよりだわ」

「ちょまー！ー！ー！ー！スカートめくり上げて確認するなー！ー！ー！ー！お前には羞恥心というものはないのかー！ー！？」

「ねえ、ちょっとトイレかしてくれない？穿き替えたいんだけど」

「聞く耳もたねえー！ー！ー！軽々と俺の言葉を無視するな！ー！」

「え、羞恥心？あー、うん、そうね。授業中にくしゃみをするのは恥ずかしいわね」

「恥ずかしがるところ微妙だー！ー！ー！というかそんな乙女チックな羞恥心を持っているやつはそんな行動をとったりはしない！ー！」

「女心を知らない人ね……」

「そんな歪んだ女心なんて存在しねえよ！ー！」

「私の中には存在してるじゃない！失礼しちゃうわ」

「ちょっと可愛く怒られたー！」

「私の中とかむしろナカね」

「漢字をカタカナに換えるだけでなぜか卑猥に!？」

「何を言ってるの?.....あつ、ナニをイってるの?」

「一回言ったのに途中で気づいてエロく言い直したー!！」

「.....おおっ!.....ナニがイってるの?」

「『を』を『が』に置き換えるだけでもすごいエロい言葉になることに感動して、頬を赤くしながら甘い吐息と共に自信満々で言ったー!っ!.....!」

「.....あー、ストップストップ。ダメよそんなのじゃ」

「.....はあはあ、な...何がだ?」

「突っ込みがあまりにも説明的過ぎるわ」

「お前にダメ出しする資格はねえよ!.....!」

「それにセリフも長いし」

「聞けーっ!」

「私が代わって手本を見せてあげるわ」

「だから聞けよ　　って、お前が突っ込みをやるのか？」

「ええ、一時的に代わってあげるわ」

「おお、そりやありがたい。いつもの俺の苦勞を少しは理解してもらいたいものだね」

「じゃあイクわよ」

「（だからカタカナにするなっ……）」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「………ちよ、ちよっと待て」

「ナニ？」

「いやそれはもういいから！………もしかして、俺がボケるのを待っているのか？」

「いえ、拓が無理矢理ボケる必要はないわ」

「（じゃあ今の沈黙はなんだったんだ……）」

「真の突っ込みはボケがいなくても突っ込めるものなのよ」

「（いや無理だろ！　　って今くらいは突っ込まないでおくか

……）」

「じゃ、あらためて」

「……………（休憩休憩つと……）」

「……………」

「……………」

「『なんで霞がメイド服を着てるんだよ……！』」

「突っ込むのおせエエエー……！！もうそのこと忘れかけてたよ……！時間差突っ込みか！真の突っ込みは時間差突っ込みまでも修得しているのか……？」

「『なんで霞が裸でベッドにいるんだよ……！』」

「捏造^{ねつぞう}だ……！！……！！今まででそんな状況に陥^なつたことなど一度もない……！霞の裸はとも見たいけどネ……！！」

「『なんで霞はそんなにカワイイんだよ……！！』」

「もはや突っ込みですらない！？というか自分で自分をカワイイとか言っつな！イタイ人間に見えるから！それにお前はカワイイ系じゃ

なくて美人系だー!!」

「『霞の小説はものすごくおもしろいなー!!』」

「もつただの褒め言葉だー!!」

「ふう、こんなところかしら」

「……………」

「どう？私の突っ込み。最高だったでしょ？」

「ああ最高だよ…………。突っ込みに突っ込みを入れることができている気分は最高だ……………」

「そう、それはよかったわね」

「……………」

「……………ん、……………」

「……………どうした？」

「いえ、たいしたことではないのだけど、ショーツが濡れて気持ち悪くって……………」

「（真顔で言われると生々しいな……………」

トイレの場所は知ってるだろ？行って脱いで来い……………」

「……………え？脱いで来い？……………ま、まさか!？」

「何驚いてんだ？早く行かないと気持ち悪いんだろ？」

「……とうとうこの時がやって来たのね……………」

「は？なんだこの時って」

「この日をどれくらい待ち遠しく感じたか！」

「だから何のこと」

「すぐに脱いでくるわ！！！」

「うわっっ！……あつぶねーな、あいつ。ドアはゆっくり閉めると親から習わなかったのか？ボタンというよりドガンツという効果音のほうที่合ってるぞ。壊れてないだろうな……？」

「ああ、良かった壊れてない。……それにしても、なんであいつあんなに気合がかった壊れてない。……それにしても、なんであいつあんなに気合がかった壊れてない？パンツ穿き替えて来るだけだろうに。ただそれだけの作業　あ、わかった！持つてくる気だな？脱いだパンツを持つてきて俺にまたあげようとしてるんだな？まったく。嬉しいつたらありゃしな　ゲフンゲフン。まったくもって迷惑だ。迷惑極まりないが、どうしてもと言うなら受け取ってやってもら」

「おまたせ！！！」

「うおっ！は、早かったな」

「ええ、この後のことを考えたら嬉しくて走ってきちゃったわ！」

「そ、そうか。そんなに俺に渡したいんだな」

「渡したい？」

「……ん？渡すものがあるんじゃないのか？」

「渡すもの………ああ！確かにそれは必要ね、うっかりしてたわ」

「（必要？うっかり？）」

「はいこれ。どこに行くときでも常備していて、やっと役に立つときが来たわ」

「………へ？こねって………」

「やっぱり避妊はしないとね。」
「コンドームは必需品だわ」

「………は？」

「何を呆けた顔してるの。貴方が渡せと言ったのでしょっ？」

「いや、そっじゃなくて」

「………今更、やっぱりヤメじゃだめよ？」

貴方がパンツ脱いで来いなんて言って、エッチしようって誘ったんだから」

「な…」

「な？」

「とっ」

「とっ？」

「とり」

「鳥？」

「取り消し イイイイイー……………!!!!!!」

「キヤア！いきなり大声出さないでよ！」

「取り消し取り消し取り消しイイ！！言い間違えた！言い間違えた！俺は脱いで来いじゃなくて穿き替えて来いつて言ったの！！そしてそれは決して誘いの文句なんかじゃない！！！！純粋な善意から

生まれた言葉だツツ!！」

「……………」

「な、なんだその疑いの目は!？」

「……………あー、はいはい。わかったわ」

「……………本当か？」

「ホントホント」

「……………ふう、一安心だ。誤解も解けてよかった」

「貴方が照れ隠しをしているのは良くわかったわ」

「わかってねエエエエエ!!!!!!」

「大丈夫大丈夫」

「何が大丈夫なんだー!？」

「笑わないから」

「ナニを見て笑わないから!？」

「……………」

「黙るなアアア!!!!!!」

「もっ、うるさい！とっつ！……！」

「いでエ！……！ちよ、お前なんで俺を床に叩きつけるんだ！？痛い
だろ！
　　ってマテマテマテマテ馬乗りはマズイって！うわ、
感触がやわらか
　　じゃなくて……！」

「いい感触でしょ？今何も穿いてないもの」

「うあ……！！……！！……！」

「大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫」

「その手のワキワキした動きが絶対に大丈夫じゃないことを確信さ
せるのだが、そこんところはどっと思えますか霞サン……！」

「……じゅるり」

「ジュルリって言った……！！……！！……！！……！！……！！……！！
現実ではありえないだろ……！！」

「……ちや……ちや……言……って……ない……で……、……ヤ……る……わ……よ……」

「霞……って……そんな……サ……バ……サ……バ……した……性……格……だ……っ……た……っ……け……！……？」

「……」

「……う……あ……、……ち……よ……っ……と……ー……ー……！！……無……言……で……チャ……ック……開……け……ん……な……ア……ア……！！……し……か……も
超……ゆ……っ……く……り……！……！……い……や……ら……し……い……！……！」

「……ね……え……拓…………愛……し……て……る……わ……」

「か、霞……………」

「拓う……………」

「か、すみ……………」

ガチャッ

「おーい！今日霞ちゃん来てるんだってー？なんだよ言ってくれよ拓！父さんに言ったらおもてなししたのに！父さんいじけちゃうゾ 二人とも何やって……………ん……………だ、ろう…ね……………エ」

「……………」

「……………」

「あ……………」

「……………」

「……………」

「お取り込み中すまんな……………」

「……………」

「……………」

「ええ、と……………」

「……………」

「……………」

「と、父さんも若い頃は、コスチュームプレイはよくしたぞ？……………」

「……………」

「……………」

「も、もちろん今も現役でやってるかな！は、はははっ……………」

「……………」

「……………」

「ももも、申し訳ありませんでしたアアア……………！！！」

ボタンッ

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

「今日は三点リーダー(…)が多かったわね」

「開口一番にそれかよ」

第6話 霞と拓と服装（後書き）

10日前後で更新とか言っておきながら20日経ってしまいましたせん。

しかしここで発表。

ちよっと10日前後は無理っばいです。

感想くれたらスピードアップ！なんて言っておきながら全然ダメでした（汗）

というのももうひとつの連載のほうに手一杯で。時間がないデス。

でも、地道ではあるけど続けていこうとは思っていますので、応援よろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5286b/>

霞と拓の日常会話

2010年10月26日14時51分発行